

4-5		主題	関節の変形拘縮が悪化した利用者への日常的なリハビリ	
リハビリ		副題	車椅子乗車時に特製の用具を使用し、持続的伸張を行い良肢位や介護上の円滑化を目指す	
研究期間	5ヶ月	事業所	東京武尊会 特別養護老人ホーム 塩船園	
発表者：佐藤 未来（さとう みく）		アドバイザー：理学療法士 悴田 明		
共同研究者：氏名 大野 敏枝 竈澤 繁 涌井 友樹				
電 話	0428-21-1011	メール	shiofuneen@tokyo-busonkai.or.jp	
FAX	0428-21-1005	URL	http://www.tokyo-busonkai.or.jp/	

今回発表の事業所やサービスの紹介	特別養護老人ホーム塩船園は、つつじ咲く国宝「塩船観音寺」を目の前に、社会福祉法人東京武尊会による3番目の施設として設立されました。 定員150名、入所者平均年齢84、58歳、平均介護度3、95
------------------	---

《研究前の状況と課題》 ○状況 ・利用者Iさんについて（胃ろう） 普通型車椅子使用し左下肢を使い多少の自操可能であったが、肺炎により約2ヶ月間入院。退院後、入所時より右片麻痺、右半身拘縮強度となり、普通型での車椅子乗車、オムツ交換が困難となる。 ・利用者Oさんについて（経口介助摂取） 右片麻痺あるも普通型車椅子使用し自操していたが、膀胱ろう造設の為約2ヶ月半入院。退院後、右片麻痺に加え全身の廃用性萎縮、疼痛がみられ長時間の座位が困難となる。 ○課題 利用者の高齢化、重度化に伴い寝たきりになり、拘縮を持つ方が増えてきた。又、リハビリスタッフによる可動域訓練や生活の中でのリハビリだけでは、緊張緩和や拘縮改善まで至らず、現状維持も困難となった。	《研究の目標と期待する成果》 ○目標 下肢関節の変形や拘縮を少しでも改善し、リラックスした良肢位を保ちサービス提供時の、介護上のリスクを回避する。 ○期待する成果 ・良座位を多くとれることで離床時間を確保し、日常の活動参加により、御本人の意欲や生活の質の向上を図る。 ・身体の緊張が緩むことで疼痛の緩和 ・股関節を開くことで陰部清拭がしやすく皮膚疾患、感染症予防になる ・骨折、脱臼の介護上リスクの低減 ・車椅子からの転落、滑り落ち防止 ・末梢循環不全の防止 以上の事を含め、廃用性症候群を少しでも防止する。
--	--

《具体的な取り組みの内容》

医師、理学療法士、看護師の助言、指示のもと日常のケアプランに拘縮変形のリハビリ的アプローチを取り入れ、家族や本人の承諾の上、特製用具を作製し、下肢の持続的伸張を行う。

実施期間

- ・Iさん（1月～6月の5ヶ月）
- ・Oさん（4月～6月の3ヶ月弱）

時間・・・午前、午後の約2時間

場所・・・随時様子観察出来るワーカー室前

方法・・・リハビリスタッフがホットパック施行し緊張を和らげてから、ワーカーで特製ベルトを変形拘縮している膝に装着し、初回は左右に0.5kgの重りを用い持続的伸張を実施する。下肢が伸張してきたところで、状態を見ながら更に重りを追加し、最終的には左右に1.5kgとする。

（重りは理学療法士、看護師指示のもと設定）
注意点・・・顔色、特製用具装着部の観察（赤くなったりしていないか、随時看護師等も確認）

離床時間を決め体調面を考慮する。

その他・・・研究のアプローチ以外は良肢位の保持や通常のリハビリは継続するものとする。
ベッド上ではポジショニングにて対応。

《取り組みの結果と評価》

Iさん

・フットレストに右足が着かなかったが、5ヵ月後の段階では下肢が伸び、右足が着くようになり、良肢位が保てるようになった。又、可動域も広がり伸張する際も疼痛が軽減した。

・経口からはアイスクリームのみドクターの許可を得、介助で摂取していたが、一部自ら摂取する動作や意欲が見受けられるようになり、ご家族も喜ばれていた。

Oさん

・足の交叉が緩和されることで車椅子乗車時安定した座位がとれ、転落防止につながった。又疼痛も緩和され「痛い痛い」との訴えが減った。

ケアワーカーよりアンケートを取った結果、多く聞かれた意見は下肢は伸張しやすくなり、着脱や排泄介助が行いやすくなった。その為、無理な力で伸張することがなくなり、陰部清拭や皮膚観察も充分出来るようになった。

《まとめ》

個人により、拘縮の伸張度合いは異なると思うが、毎日持続的に行う事が大事だとわかった。又、ベッド上でのポジショニングも統一する事で拘縮予防、悪化防止につながっていく。股関節などの可動域が広がることにより良座位がとれ車椅子乗車の時間が増え生活の質の向上につながった。さらに職員間の連携や良肢位に対する意識の向上が図られた。

《提案と発信》

一度拘縮してしまったら治らないと諦めてしまっていないですか？強度の拘縮に対しても持続的伸張を行う事で、緩和や改善につながっていくと思います。今後は下肢だけでなく他の拘縮部に対してのアプローチも取り組んでいきたい。

【メモ欄】